1. 真冬の代走

「さ、サンダーバード、車両故障です！」
「何だって!?」
年の瀬も迫りに迫った大晦日の前日のことだった。
年末年始とお盆休み中は特急達にとって最も忙しい時期だ。故郷へ帰ろうとする人、都会で年越しをしようとする人が入り交じり、上り列車も下り列車も終日混雑する。
だが、クリスマスイブから断続的に降り続いた雪のせいで、どの車両もいつトラブルが起きてもおかしくはない状況にあった。例え雪が降っていなかったとしても、一日の内に長距離を何度も高速で走行している特急車両がおかれている状況は過酷なもので、車両故障は珍しい事ではない。だから、予備としていくつか編成を用意しておくことが基本だ。だから、その予備を使えばいいじゃないかと、サンダーバードは簡単に考えていた。
車両故障と予備編成を使用する件について上司に報告するため、サンダーバードは整備担当者から渡された故障箇所が書かれた書類を持って、上司の部屋へと足を運んだ。
「失礼します」
「おう、お疲れさん」
扉をノックしてから部屋に入ると、サンダーバードの先代に当たる雷鳥が来ていた。その姿を見て、サンダーバードの緊張が少しほぐれる。
「何だよ、おやっさんも来てたのか」
「当たり前だろう。お前のやらかしたことだ、引退まではわしも知っておく義務があるからな」
その言葉を聞いて、ふん、と鼻を鳴らすサンダーバードに、こら、と雷鳥が顔をしかめる。そんな二人の様子に、上司は苦笑しながら、まあまあと場を取りなす。
「まずはサンダーバードから今回の車両故障の話を聞こうじゃないか」
雷鳥が先に報告したのか、既に故障の件は上司にも伝わっていたので、サンダーバードは二人の前で淡々と事実を説明していく。
「……ということですので、明日は予備の編成を使わせて頂きたいのですが」

「何を言ってる。お前の車両はこの前の大雪で故障を起こして、既に修理に入っているだろうが。予備なんか無いぞ」
　雷鳥の言葉に、サンダーバードはさっと全身から血の気が引いていくような気がした。言われてみれば、数日前に降った雪のせいで、別の車両に故障が発生したから、その時に予備の車両を使っているのだ。ここ数日の忙しさですっかり頭から抜け落ちていた。
「どうする、明日は大晦日だ。どの列車も予約でほぼ満席だぞ」
「分かってるよそんな事は！」
　咄嗟にそう答えたものの、具体的な案など何も無かった。雷鳥の編成を借りようにも、今や一往復のみとなった雷鳥用の車両は京都所属で、金沢に予備の編成は無いし、そもそも一編成の車両数が違うからそのまま運用に回すことは出来ない。はくたかも一編成が車両故障を起こしており余裕が無く、しらさぎも今は予備まで使っている状況で、サンダーバードに回せる車両などあるはずがなかった。
　まさに八方ふさがり。どうする、と必死で手立てを考えながら唇を噛んでいると、雷鳥が言った。
「あれの力を借りたらどうだ」
「あれ？」
「４８９系」
　ええっ、と驚きの声がサンダーバードから漏れた。確かにこの状況で金沢所属で特急として走らせる事が出来る車両といえば、４８９系、通称ボンネットのあの車両しかいない。
「でも、座席数足りないだろ？前は繁忙期でもなんでもなかったから特にトラブルにはならなかったけど、今回は大晦日だし」
　サンダーバードがそう渋ると、雷鳥がサンダーバードの肩を叩いた。
「大丈夫、車両の数は同じだ。富山行きの列車にあの車両は当てられないが、金沢止まりか和倉温泉行きであまり人が乗ってこない時間帯ならば問題ないだろう。グリーン車の乗客には座席の変更をしてもらわなければならないがな」
　そうでしょう、と雷鳥は上司の方を見る。上司も致し方ないと首を縦に振った。
「それしかないな。サンダーバード、お前は運転所に連絡して明日の１２号と１９号に４８９系を当てるように言ってくれ。１２号は和倉温泉始発だから出発までに回送しておく必要がある。それと、４８９系は切

り離し出来ないからそのまま和倉温泉と大阪を往復させるぞ」
「わかりました！行ってきます！」
慌ただしく部屋を出て行こうとするサンダーバードに、あれはご老体だから大事に扱えよ！と声を掛ける。その台詞を聞いた上司が後ろで吹き出した。
「そんな事言ったら白山と能登が怒るだろう」
「そうですね。すんません」
お前の使ってる４８５系とさほど変わらないだろうと上司に言われて、雷鳥は違いないと笑う。ご老体なのはお互い様だった。
「ただなあ、あれもいつまで置いておけるか……今はまだはくたかの予備が無いから残しておいてやれるが……」
「寂しいこと言わないでくださいよ。今や貴重なボンネット型車両だ。それに、西へ東へどこだって走れるのはあれくらいなもんでしょう。そんな車両が一編成いたって、いいと思いますけどね」
「雷鳥の言うとおりなんだがなあ。いかんせん設備がな」
上司の渋い顔に、雷鳥は肩を竦めるのみに止めておいた。そんな事は言われなくても分かっているのだ。雷鳥が使っている車両も同じ事を言われているし、はくたかの代走に入った時に客が車両の古さについて文句を言っている場面に出くわしたこともある。だが、４８９系は、全ての特急達にとって少なからず縁のある車両であり、誰もが一度は必ず世話になったことがある車両だ。いなくなれば皆寂しがるだろう。
「まあ、あれはまだまだ活躍できますよ。特にこれからの季節は雪で車両故障も増えますからね。特にはくたかの」
「嫌な話だが、まあそうだろうな」
そんなことをひとしきり話した後、雷鳥も部屋から出た。サンダーバードは首尾良く４８９系を手配できたのだろうかと少し心配になったが、もうじき引退する事が決まっている自分が、いつまでもサンダーバードの世話を焼く訳にもいくまいと思い直して、運転所へ向かおうとしていた足を止めた。

そして翌日。
何とか車両運用の都合を付けたサンダーバードは、回送列車と共に和倉温泉駅にいた。
温泉から帰るには早すぎる時間帯、普段ならばサラ

リーマンの利用が多いこの列車も、大晦日とあって乗客は少ない。金沢からはもう少し乗ってくるだろうが、それまでは大きな混乱も無く運転できそうだった。
問題は大阪からの折り返しとなる19号だ。そちらは指定席の予約がほぼ満席、自由席も混雑が見込まれる。それに加えてこの車両が走るとなれば、各駅に鉄道ファンが撮影に来てもおかしくはない。無駄な混乱を招かなければ良いが、と少し不安になる。
発車時間まではまだ余裕があったが、駅に来る人足が途絶えた。持てあました時間を最終点検に当てようと、サンダーバードは車両に沿ってホームの端から端までを一往復する事にした。何せ普段使い慣れている車両とは勝手が違う。この一番のかき入れ時に、綱渡りのようにして編成をやりくりしている状況だから、少しの不手際も許されない。
最後尾までたどり着くと、赤く点灯した前照灯と、ヘッドマークの無い部分に蛍光灯がちらついているのが見えた。
はくたかやしらさぎの様に、先代の時からこの車両を使ったことがある特急は、それ専用のヘッドマークが用意されているのだが、サンダーバードは定期列車としてこのボンネット型の車両で運転した実績が無い。だからヘッドマークがなく、代走してもらう時もこのように蛍光灯むき出しの状態で走る事になる。
夏に一度この車両を使ったときも同じだった。その時はどうにか別のヘッドマークを提示出来ないかと掛け合ったのだが、乗客を混乱させてしまうからと言って却下された。かといって、この先何度使うか分からないものを新しく作ってくれるはずもなかった。
はくたかも、しらさぎも持っている、先代から引き継がれたヘッドマークが、自分には無い事をサンダーバードは少し寂しく思った。先代に当たる雷鳥は雷鳥で自分用のヘッドマークを持っているだろうが、それはサンダーバードのものではないからだ。
「サンダーバードさーん！そろそろ出ますよ」
後ろからそう声を掛けられて、ハッと我に返った。思った以上に長い間この場所で足を止めていたらしい。慌てて時計を見ると、出発時間まで一分を切っていた。
「わかりました！今乗ります！」
駅員に合図をして、最後尾の扉から車内に乗り込んだ。程なくして発車メロディが流れ、扉が閉まると、サンダーバード12号はゆっくりと動き出す。
車掌のアナウンスを聞きながら、先頭車へ向かって車内を歩いて行くと、独特の匂いがした。自分の車両

とは違うが、どこかで嗅いだことのある独特の匂い。何だっただろうかと考えたが、すぐには思い出せなかった。

列車は順調に走行している。停車駅毎にぱらぱらと乗り込む人に案内を続けていると、あっという間に金沢まで来ていた。

金沢駅では普段、列車の結合を行うために多くの停車時間が設けられているが、今日はその作業が無いので少し時間に余裕があった。ホームに下りてぐっと身体を伸ばしていると、見知った顔が階段を上がってくるのが見えた。

「やあ、サンダーバード、お疲れ様」

「おはよう、サンダーバード。わあ、本当に４８９さんで走るんだね」

しらさぎとはくたかは見慣れぬクリーム色の車体の横に立つサンダーバードを見て、驚いたという表情を浮かべていた。

「仕方ないだろう、車両が故障中なんだから」

「はくたかがお世話になってる所はよく見ていたけど、まさか君まで４８９系のお世話になるとはね」

そう言うしらさぎの横で、はくたかは心配そうな顔をしている。

「壊さないようにしてくれよ。これから俺も４８９さんにお世話になる事が増えるだろうし」

予備編成がぎりぎりのはくたかは、雪が降ってダイヤが乱れたり、車両に不具合が出た時に４８９系を使うことが多い。それで恩義を感じているのか分からないが、はくたかはこの車両を『さん』付けで呼ぶのだ。

「はいはい。でもなあ、オレだって故障させたいと思ってる訳じゃないんだぞ！車両故障は不可抗力だ、不可抗力」

「そんな事、私もはくたかも分かってるよ。故障を起こしてるのが君の車両だけだと思わないで欲しいね」

「そうだよ。それでも、４８９さんが壊れたら、予備の編成が修理中の俺は運休することになるんだから」

心配なのだと言うはくたかに、分かったよと頷いて、サンダーバードは再び車両に乗り込んだ。出発時間が迫っている。

「二人とも、今日は年内最終日なんだ、気をつけろよ！」

「その言葉、そっくり君に返すよ、サンダーバード」

「気をつけて！」

金沢駅特有の、琴の音を模した発車メロディが構内に響く。手を振るしらさぎとはくたかに窓越しに手を振り返しているうちに、列車が動き出した。がたんが

たんと車輪がレールの継ぎ目を渡る音に混ざって、車内からは鉄道唱歌が聞こえて来た。これから大阪まで、この車両との三時間近い旅の始まりだった。

＊＊＊

サンダーバードが４８９系で運転してから二日後、一月二日にははくたかでの代走が決まった。大晦日から元旦にかけて北陸地方の雪は小康状態となっていたが、年明け前に修理に入った車両の運用が間に合わず、臨時列車を４８９系で走らせる事になったのだ。

制服に着替えながら、はくたかは身の引き締まる思いがしていた。

決して自分の車両を軽く見ているわけではない。ただ、自分が普段から使っている６８１系と、はくたかと入れ替わるようにして引退してしまった白山の為に作られ、白山や先代はくたかが、そして多くの特急が使ってきた４８９系とでは、肩に掛かる重みが違う気がするのだ。

製造から既に四十年近くが経過しようとしており、あちこちガタが来ている事も否めない。が、金沢総合車両所のスタッフによって丁寧にメンテナンスされた４８９系は、定期列車運用から退いてもなお、困った時には臨時用の列車としてはくたかを助けてくれる。

ふと手元を見ると、ボタンを留めようとしていた手が震えていた。既に何度も使ったことがある車両なのだからおかしな話だ、どうしてか毎回こうなるのだ。

着替えを終え、休憩室へ向かうと、そこには北越が一人でソファーに座っていた。臨時はくたかのすぐ後に出る列車に乗るのだろう。

「４８９系で出るんだってね」

「ええ」

「頑張ってね。４８９系は北越急行線はもちろん、北陸本線でも所定の速度が出せないから若干遅れが出るだろうし。時々しか運転しない車両じゃ勝手も違うだろう。まあ、この時期は雪で遅れやすい時期だから、多少遅れたところで気に病むことはないよ」

北越がいつも以上に声を掛けてくれるのは、きっとはくたかの強ばった顔を見たからだ。いい加減慣れろと言わない所が優しいと、はくたかは内心北越に感謝した。

「ありがとうございます、そう言って頂けると少しは

気が楽になります」
　北越の言葉に、張り詰めていた何かが少しだけ緩んだ気がした。北越はほっとした表情を浮かべて、ぽん、とはくたかの肩を優しく叩く。
「何緊張しているんだい。久しぶりってわけでもないでしょうに。それに、二日前にはサンダーバードが大阪まで走らせているんだ。４８９系も暖まって良い頃合いだろうよ」
「そうなんですけど、何となく」
「だから、遅れは気にするなって。仕方ないって割り切りも必要だよ」
　ほら、行ってきなさい、という北越の言葉に、背中を押してもらった気がした。はい、と大きく頷いて、はくたかは鞄を手に取ると、ドアに向かって歩いて行く。
「行ってきます」
「気をつけてね」
　ドアを閉めようとした時、北越がひらりと手を振ったのが見えた。両手がふさがっていたはくたかは、代わりにぺこりと頭を下げる。
　車両の所へ行ってから弱音を吐いてはいられない。長い廊下を歩きながら、きゅっと顔を引き締め、はくたかはホームへと向かった。

　ホームには既に４８９系が待機していた。
　構内放送でひっきりなしに車両変更のアナウンスが流れている。グリーン車の位置が６８１系と違うため、グリーン車と四号車の乗客は座席を移動しなければならない。その案内をするため、普段よりも多くの案内係がホームに出ていた。
「あの、すみません」
「はい？」
　その時、後ろから一人の老婆に声をかけられた。少しかがんで顔を寄せると、どうやらこのはくたかに乗る予定らしい。手には少し皺になった切符が二枚。指定席特急券と乗車券だった。
「車両が変更になったって駅員さんに聞いたんですけど、わたしはどこに座ればいいんですかねぇ」
「ちょっとお待ち下さい」
　断りを入れて、老婆が手にしていた指定席券を受け取る。切符に印字された文字を見ると、幸い今回移動がない号車の座席だった。
「この座席でしたら、券に書かれているとおりの座席

に座って下さい。三号車です」
「そうですか、ありがとう」
ぺこりとはくたかに頭を下げた老婆は、ゆっくりとした足取りで三号車へ向かって歩いていった。その様子を見ていたはくたかだったが、ふと気に掛かった事があった。老婆の行き先だ。
途中駅で下車せず、東京方面へ向かう場合、越後湯沢での乗換がある。通常ならば十分程度の乗り換え時間があるのだが、今回は車両が変更になった所為で出発前から遅延することが見込まれている。階段やエスカレーターを使ってそれなりの距離を歩く必要がある越後湯沢駅で、あの老婆がすぐの接続となる「とき」に乗るのは難しいのではないか。
はくたかは車両に乗り込むと、近くにいた車掌に先ほどの話をした。
「三号車に座席があるおばあさんがどこへ行くのか確認して頂けませんか。足が悪いようなので、新幹線への乗り換えがある場合、ちょっと難しいかもしれません」
「わかりました、確認します」
「状況次第ですが、後続の新幹線への振り替えも検討しなければならないかもしれません。そもそも、この列車が予定の新幹線に接続できるかが怪しいのですけど」
そんな話をしている間に、列車は動き出していた。別の車掌が流している車内アナウンスを聞きながら、はくたかは車両と手分けして車内を巡回することにした。あの老婆だけでなく、他にも乗り換えが難しい乗客がいるかもしれないと思ったからだ。
Uターンラッシュには少し早い時期だからか、満席ということはないが、指定席自由席ともにそれなりに座席は埋まっている。車両が変更になり申し訳ありませんと言いながら歩いていると、大抵文句を言ってくる乗客がいるものだが、今回も例に漏れず、中年の男性にぼろいだのなんだのと言って絡まれてしまった。
「高い料金払ってるんだからよ、こんなぼろい車両じゃなくていつもの走らせろよな。それにどうせ遅れるんだろ。今から切符の払い戻しをして欲しいくらいだ」
「申し訳ございません。車両不具合により代わりの列車を用意することが出来ず、お客様にはご迷惑をお掛けしております」
その客に向かって頭を下げながらも、内心は釈然としないものを抱えていた。確かにはくたかが普段使っている681系よりは古くて年季が入っているだろう

が、椅子が破れたりしているわけではないし、乗り心地だってそう悪くはない。それを見た目だけで文句を言われることが許せなかったのだ。

この車両ははくたかの先代や白山、そしてこの前引退した能登がこれまで大切に使ってきた車両だ。古い物を大切に使って何が悪いのだと、思わず声に出してしまいそうだった。

その時、背後からあれま、と女の人の声がした。

「え？」

何事かとそちらを見れば、そこには先ほどはくたかに座席を訊ねてきた老婆がいた。

「文句を言うもんじゃない。それともあんたは運休した方がよかったって言うのかい？古いって言っても、雨漏りしたりしているわけでもないし、走ってくれるだけ有り難いと思いなさいよ」

「おばあさん……」

まさか通りすがりの老婆に説教されるとは思っていなかったのだろう。その男性はムッとした表情になりながらも、それ以上何か言う事はしなかった。はくたかは男性にもう一度頭を下げてから、立ち去ろうとする老婆の背中を追いかける。

「あの、先ほどは有り難うございました」

デッキに出た所で追いついて、はくたかは老婆に礼を言った。

「気にしないでね。あんな人はどこに行ったっているもんだから」

けらけらと笑う老婆を前にすると、先ほどまで胸に抱えていた不満がすっと消えていくような気がした。

「この車両、若いときに良く乗ったから、懐かしくなって、ちょっと見て回ってたの」

「そうなんですか」

「むかーし昔だけどねぇ。そうそう、あんたによく似た人が乗ってた事があってねぇ」

その時、がたんと車両が大きく横に揺れた。慣れているはくたかは踏みとどまったが、目の前に立つ老婆はバランスを崩し、今にも倒れそうになっている。

「危ない！」

はくたかは咄嗟に手を伸ばし、倒れそうになる老婆の身体を抱き留めた。そのまま身体を抱き起こし、寸での所で間に合ったと安堵のため息を吐いた所で、老婆は驚いたような顔をしていた。

「大丈夫ですか？お怪我はありませんか」

「あ、ううん、大丈夫……ありがとうね。助かったわ」